

香川大学における中国語教育（第一部）

高橋 明 郎*

1 はじめに

香川大学では比較的早くから中国語の教育が行われてきた。おおまかに沿革をたどると、もともと旧高松高等商業学校（現経済学部）に一名中国語の担当者がおり、それが新制大学発足により学芸学部（現教育学部）に移った。なお、高等商業には他に中国人のスタッフがいた時期がある。後に一般教育部が設立されると、当然そのメンバーにもなった。しばらくこの一名が中国語教育のあらゆる責任を負っていた。

この間昭和47年の日中国交正常化等の対中関係の変化もあり、初修外国語として中国語の履修を希望する学生も増加した。これに伴う負担増を一名の教官が受忍してきたのである。しかし早晩限界が来るのも明らかであった。昭和56年従来の経済、教育、農学の3学部に加え新たに法学部が設置され、それにとまって一般教育籍の教官の定員増が有り、その増員枠の一名を、2人目の中国語担当者（専攻分野は比較文学）に充てることとなった。公募のうえ翌昭和57年4月付で当該教官が着任した。

こうして専任教官2名（教授1、助教授1）と非常勤講師数名による中国語教育体制となる。平成7年経済学部の改組要員として専任教官の所属が教育学部から経済学部に移され、同時に学科目としての「中国語」は香川大学から消滅したが、一応現在のところ、中国語教育の面では、この体制が続いている。

専任2名体制になった最初の数年が、中国語教育の最も安定した時期であった。しかし昭和60年代に入ると、各学科の臨時学生定員増、教育学部の総合科学課程設置による外国語必修単位の変更、土曜閉講、そして最近の教育学部一部コースの閉鎖、教養教育の大幅な見直しと、外国語教育を支える条件が次々に変化していった。また従来の教育方法の見直しも、外国語教育担当者の共通の話題となっていった。これらの流れのなかで、香川大学における中国語教育も相当に変化していった。筆者はその経過の一部を既に発表している（註1）が、本稿では、それ以降の変遷を含めて述べ、今後の見通しを考えたい。そしてこの第一部では、主として新カリキュラム施行前の変遷をまとめる。

2 教養教育体制変更前の中国語教育の改善

2・1 カリキュラムの系統化

香川大学の初修外国語はもともと次のような区分がなされていた。（当時の必修単位については下の表1を参考にして欲しい）1年前期から2年後期までの4学期にIからIVのグレード・ナンバーが付いており、それぞれがa（文法）b（読本）に分かれていた。伝統的な文法と講読と

*助教授 経済学部（中国文化論）

というパターンである。

その上に分野区分のない上級VとVIが開設されている。

表1 (註1論文より転載)

香川大学の卒業要件としての現在の外国語単位
(中国語・英語の場合)

卒業要件の 初修外国語 単位数	学部・コース	科 目	初 級		中 級				上級		英 語 (単位)	卒業要件の外国語総単位数
			標準履習年次		2		3 又は 4					
			グ レ ー ド		I	II	III	IV	V	VI		
			a	b	a	b	a	b				
			文 法	発 音	文 法	発 音	読 本	読 本				
4	農 学 部		○	○	○	○					8	12
4	教育学部	総合科学〈理科〉	○	○	○	○					8	12
※0乃至8		教員養成※	○	○	○	○	○	○	○		0乃至8	8
8		総合科学〈文科〉	○	○	○	○	○	○	○		8	16
		総合科学中国語文化専攻	○	○	○	○	○	○	○	△	△	
8	経 済 学 部		○	○	○	○	○	○	○		8	16
8	法 学 部		○	○	○	○	○	○	○		8	16

- ※ 一種の外国語で8単位を修得する。
(英語のみでも初修外国語のみでも構わない)
- △ 専門科目名で受講する。

ただし運用自体は比較的自由になされていて、ドイツ語やフランス語のように名詞の格変化から理詰めにも多量の文法を教授する必要の少ない中国語は、特に文法を独立させずにいた。したがって一週間にあるa b二つの授業は、それぞれの担当教官が別の初級用の教科書を使用して、特に関連無く進行された。当然、同じ文法事項が脈絡無く1年に2回現れる。多少の繰り返しの効用は認められるにせよ無駄も多い。

2年間の効率的な学習のために、こうした重複の整理・統合を行うこととし、まず昭和63年度、初級のaの授業を文法専用とし、1年間週1回の授業で集中的に一応の文法事項を説明し、2年目では特に文法を主とする授業を置かないこととした。bの授業では文法以外の発音、生活表現、簡単な読解を行うこととした。

翌平成元年度、2年生向けの中級の整理に入った。従来はこれも担当教官の裁量にまかされていて、2年生向けの総合テキストを使うものから、魯迅はては「紅樓夢」の講読までが行われていた。従って教官の組み合わせ次第で、あるクラスは一年間読解だけ、あるクラスでは逆に全く読解の授業が無いということもあった。そこで、まず大学の中では最も実用性のある読解を全ての学生に課すことにし、bの記号の授業で行うことにした。グレードⅢでは注音と注釈付きのテキストを使用し、グレードⅣでは注音と注釈を外した原書形式のテキストを使用した。一方aの授業では読解は扱わないこととし、担当教官が作文なり口頭練習なりの重点を設定して授業を行

うようにした。こうして2年生向けの中級3クラスでは、上の授業内容に適したテキストを担当教官がそれぞれ選んで授業を行う形態となった。

したがって香川大学で中国語を受講する学生は、どのクラスであれ、どの教官の授業であれ、2年間でほぼ同等の内容の学習をする形になり、これは現在のカリキュラムでも維持されている。

2・2 教官構成の変化

前述のように香川大学には2名の中国語担当の専任教官がいるが、同時に数名の非常勤講師と契約して授業をこなしている。四国という場所で中国語の非常勤講師を得るのは至難なことである。非常勤講師は一応常勤講師と同等かそれ以上の教育研究歴が要求されるという内規があるのも、状況を難しくしている。その中、小林主任教授が苦心して捜され、数名の方と契約ができていた。

しかしこうした方々の一部が平成に入る頃には高齢になられつつあった。当時一般教育部では、非常勤講師の70歳定年化が方針になっており、70歳以上の方は、従来からの継続の方が所謂グランドファーザー・クローズ（明文化されてはいなかったが）のような形で引き続き任用されているだけとなった。それぞれの講師の方は多量のプリントを用意されたりして極めて熱心に授業をしておられたが、外国語担当ということで風当たりも強く、我々もそれらの講師の方の担当時間数を削ったり、あるいは体力を要する発音系の特に1年向けの授業から文法、もしくは中級の講読へと割当を替えたりという工夫をしながら授業を計画してゆくことになる。しかしそうした工夫をこらしても、近い数年のうちに交代の人事を行わねばならないことは明白であった。

（最終的にこの事態が解消できたのは平成6年である）

そこで非常勤講師の交代時期に入ったのを機会に、中国語のネイティブ・スピーカーをこの際非常勤講師として迎えられるか検討し、平成元年度、初めて初級の2クラスの授業に李佳坤講師を迎えた。この当時の比較的若手の中国人は、その学歴に文化大革命期及びその処理の時期の短縮された就学期間を含んでいるため、日本の学制の就学期間をそのままあてはめると資格上の問題が生じるおそれがあり、採用に当たっては小林主任教授が中国領事館への照会の任に当たられたり、採用母体であった教育学部人事委員会との折衝では秦一般教育部主事にも後押ししていただいた他、武上、山部の一般教育係長（当時）にも事務上いろいろ考えていただき、難産のすえ実現できた。

当初初級4クラス中2クラスにのみ中国人教師を充てていたが、平成4年度からは、従来の原則として1クラスを1年間同一教官が受け持つという体制を、半期で教官を交代する形に変更して、それにより初級全4クラスが最低半期はネイティブ・スピーカーの指導を受けられるようになった。この年土曜閉講の実施にともない一般教育の時間割りの変更が行われたのを機に、従来月曜に1コマあった初級の開設時間を2コマにする改善があり、その為に1人の非常勤のネイティブ・スピーカーが一日2クラス担当できるようになったことも、この指導体制を可能にした要因である。

平成5年度には、中国語会話（後述）の開設にともない中国人教師を更に増やす必要に迫られた。そこで新たな方とも契約した。こうして初級4クラスすべてで、週2回の授業のうち1回、すなわち発音、表現練習の授業I b II bで1年間通してネイティブ・スピーカーによる指導が可

能となった。参考までに本年度までの非常勤講師の担当比率を示しておく。

表2 非常勤講師担当コマ（半期1週間当たり）

	日本人非常勤	担 当 コ マ	中国人非常勤	担 当 コ マ
昭 和 63 年 度	3名	7	0名	0
平 成 元 年 度	3名	5	1名	2
平 成 5 年 度	2名	3	3名	6
平 成 7 年 度	1名	1	4名	7

外国人の契約者が増えるに従い、それぞれの講師の手続きが入国時の身分により異なるため、事務手続きは煩瑣になり、当時の松本一般教育係長には入国管理事務所との連絡、協議で相当に御苦労いただいたものであった。

無論ネイティブ・スピーカーは万能ではない。現在の4名のうち大学で中国語を専攻した者はなく、一名が語文教師であったが、他は日本語や経済、農学の専攻者である。たゞいづれも中国語の教授経験を持ち、発音上も訛りが無い。中国語の授業では、はっきりとネイティブ・スピーカーを配当する科目を決めている。中国語会話と初級の発音、ヒアリング系統の時間である。そして文法や読解、作文は日本人が担当している。

2・3 カリキュラムの多様化—中国語会話の開設

香川大学では昭和60年代には3種の外国語会話が開かれていた。このうち英会話とドイツ語会話は一般教育部で、フランス語会話は経済学部でそれぞれ開かれていた。前2者は香川大学の雇用する専任の所謂「外国人教師」が担当するものである。フランス語会話は非常勤ながらこれも外国人講師を用いる枠のものである。

こうした制度の裏付けのない後発の中国語にはなかなか開設の条件が整わなかった。ネイティブ・スピーカーをまず初級のクラスに優先して配置したこともあり、ようやく中国語会話を非常勤枠を工夫して開設できたのは平成5年度のことであった。

開設にさきがけて、この科目を従来のカリキュラムの中にどう位置づけるかの検討が必要であった。というのも2年次配当科目として卒業要件単位の中に含めることができるからである。他の中級科目と異なり、わざわざ会話という名前で出すのだから、ネイティブ・スピーカーに小人数をじっくり教育してもらおう。そのため受講者を15人程度にする。そして1年次に少なくとも単位の取り落としのない学生にのみ受講させる。それから半期では不十分なので1年間勉強してもらおう。

こうした大まかな計画の上で、2年次の履修の仕方を2・1で述べたカリキュラムの中に組み込む為に、この科目をⅢaⅣa対応のものとした。当時の卒業要件単位は中級の4単位を含んでいた。会話を選択した学生は、通年で2単位になる。既述のようにⅢaⅣaの授業は作文のこともあるが、また日常表現といった会話的側面を持つものもあり、なるべく中国語の聴く、話す、書く、読むを偏らずに学習させるというカリキュラムのねらいから、これと会話を合わせて学習させることは避けたい。むしろ会話は読解を内容とするⅢbⅣbと組み合わせる履修させようと

考えた。これはまた、最初の会話の担当教官の、「こんにちは」レベルならともかく、それ以上のレベルを望む場合は、「読めない人は結局話せない」という意向にも配慮したものである。

こうして平成5年「中国語会話ⅢⅣ」が始まった。予め受講希望者を募ったところ、こちらの想定定員を大きく上回る60名近くが集まり、急遽定員を25名程度にして1年次の中国語の成績順に受講者を決定した。1年の会話の学習は相当の予習を要求するため、当初他に比べ単位が取りやすいかもしれないと考えた学生も多かったようだが、そうした学生は最近では減って、ほぼ定員なみの希望者がいる状態に落ち着いている。

2年おくれて平成7年度には半期ものながら、これに続く「中国語会話Ⅴ」を「中国語会話ⅢⅣ」受講済みの3年次以上の学生向けに開設し現在に至っている。

2・4 カリキュラムの共通化と共通テストの試み

2・1のカリキュラムの系統化と同時に着手したのがカリキュラムの共通化である。当時の香川大学のように2年間必修制を敷いている場合、2年目頭初の学生のレベルの不統一が問題であった。これには二つの面がある。

1年間に成績上位の学生と下位の学生のレベルは大きく開いてしまい、それらが同じクラスで受講する為、授業の進度をどちらに合わせるかで全くクラスの学習密度が変わってしまうことが第一のばらつきである。そして第二のばらつきは、教科書がばらばらであるため、そもそも1年次に教わる内容そのものまでさまざまであることである。

このうち最初の面は進度別クラスにしない限り解決は不可能である。したがってクラスの学力がばらつかないように、1年次の成績をもとに、2年次で改めてクラスを作り直すという程度の対応しかできなかった。

しかしいま一つの方法は比較的簡単に改善できそうであった。平成元年度に初級の文法の教科書を2種類から1つを選択することとした。平成3年度には全4クラスの文法の教科書を1種類とした。こうして2年次の学生が前年どういった内容の学習をし、またそれぞれの文法項目をどのような名称で学習しているか（中国語の場合呼称は教科書によりまちまちである）を知るには、1冊の教科書を参照すれば足りるようになった。

ところでこの頃、一般教育部では授業改善に向けた協議に入っていて、初修外国語の分野でも会議がもたれていた。詳しくは第二部で触れるが、初修外国語の分野では、これまであまりに細分化されていた1単位ごとの科目を統合して、週2回の授業を一まとまりのものと考え、a bに分割せず、各グレード毎に2単位ずつ与える形にすることで合意されつつあった。そうなれば当然複数の教官が合議で成績決定するという形にならざるをえない。正式の切り替え前に、そういった形態の実験・研究も行わねばならない。

その試験の意味もあり、平成4年度、文法の試験を共通化した。同一の問題で試験を行い、評価はその得点をもとに下すこととし、合わせてこの年度から各学期に中間・期末の2回の定期試験を行うこととなった。これは学生の試験準備の軽減と、いわゆる「一発勝負」で失敗してしまう危険を回避する為のものである。

平成5年度、後述の新カリキュラムの試行期間として初級のすべてのクラスで教科書を統一した。具体的にはメイン・テキストを定め、そのうちの会話部分とその応用を中国人教師が、そし

て文法と作文を日本人教師が分担して行うものであり、文法の例文の補充のためもう1冊をサブ・テキストとして使用した。同時に初級はヒアリングをふくむ総てが共通問題となった。そして1年次の受講者全員をこの得点順に並べ、それをもとに成績判定をした。

具体的手順についてはこれも第二部で述べるが、この試行でほぼ新カリキュラムを実行できる体制を作れた。この間、さまざまな試行に協力して下さった非常勤のスタッフの方々々に感謝する次第である。

2・5 クラスの小人数化

外国語のクラス規模の大きさは香川大学に限らずどの大学でも問題になっているであろう。大きな人員配置でもないかぎり抜本的改善は無理であるが、なにがしかの工夫により僅かでも改善できればそれにこしたことはない。

昭和60年代香川大学の中国語のクラス規模は以下の通りであった。初級は学部別になっており、法学・経済合わせて初修外国語全体で9クラスあり、そのうち2クラス（チ組・リ組という名称だった）を中国語が担当していた。その2クラスは定員制で、入学後独仏中露の4ヶ国語のうちから第1～第4希望までをマークシートに記入させ、コンピューターで自動的に割り振るもので、1クラス定員が65名（ただし入学者が普通割増されるため実際は70名近くであった）、中国語の場合は天安門事件の翌年を除き、すべて第1希望の学生ばかりであった。これに教育学部、農学部各1クラスがあり、こちらは自由選択で、教育が約60名、農学が約50名程度の受講者であった。

中級は法学、経済がそのまま2クラス持ち上がり、農学部学生は1年次のみ必修なので2年次の受講者が数名であることもあり、教育と統合して1クラスを作っていた。したがって約70名クラスが3つ編成されていた。ところが単位を落とした学生がこれに加わる為に実際は平均しても90名近い人数が1クラスで受講していた。（初級は再履修者向けクラスが独立して設置されていたので、上の定員どおりのクラスであった）。

このクラス規模の改善は、カリキュラム改革とは逆に中級から始められた。上述のようにクラス規模が著しく大きかったためである。特に再履修の学生については自由にクラスを選択させたために、学生が3クラスに分散していなかった。たとえば予習に時間がかかり単位認定も辛めの筆者のクラスはほぼ定員どおり授業ができたのに対し、比較的単位を取りやすいと見られた授業は相当の人数に膨れ上がった。その最大のクラスはついに120名近くになり、一般教育部内でも1、2という広さの教室を使わざるをえず、担当の教官（非常勤の方であった）からもさすがに何とかならないかと申し入れもあったので、中級の受講クラスを原則にぴったり合わせて運用することにした。つまり原則として学生をクラス貼り付けにし、ただし従来からの流れも有るので中級を4科目既に受講している学生については一定の選択を認めることにした。

このことで、まずこれまで2年次の中で履修を放棄して安易に翌年再履修に回る学生がかなり見られたのが少しく改善された。また2・1のカリキュラムの系統化により、一応総ての2年生に分野の偏った学習をさせないという方向にも沿うものになった。こうして3クラスが比較的似た規模で運営されることになったが、なお過大な学生であることには変わりなかった。

ところが一方で、教育学部は履修規定の切り替えを行って、その結果、必修の時間割が過密になり、教員養成系（ここは従来外国語は他学部の半分しか必修として課さず、英語か初修外国語

のいずれか1種類を8単位学習すればよいだけだった)の一部の専攻では取得する教員免許によっては事実上初修外国語の選択ができなくなって、全体として初修外国語を選択する学生が減少傾向にあった。また昭和63年度に教育学部総合科学課程が開かれ、このうち文科系の2コースは法・経両学部と同じ必修単位を課すことになったが、一方理科系の2コースでは従来の教員養成よりは多いものの初修外国語の必修単位が1年目の4単位のみとなった。従来の農学部の場合、この理科系の学生は1年次に受講してもほとんど2年次は履修しないと見てよいと判断された。

つまり従来教育学部に1クラス割いていたが、受講者は減少する見通しがたった。そこで平成4年度から中級では新2年生の人数を3クラスに平均化することとし、この年度は従来の教育学部のクラスに法学部の2年生の一部を合流させた。そして翌平成5年からは1年次の成績をもとに2年次のクラスを白紙から全面的に作り替えることにした。これらにより、学力のほぼ平均化された70~75名の3クラスが、新カリキュラムの採用時期まで続く。

初級については平成4年、始めて学部別の編成を中止した。背景は上述の教育学部の履修状況に加え、農学部の受講希望者もこの時期30名程度だったためである。こうして中級と同じような、学部の垣根を外した人数のならし方を取ることにしたが、実は初級は解決しなくてはならない問題を抱えていた。

それは4クラスのうち法・経学部用のリ組だけが、他の3クラスと開設時間が異なることである。チ組の定員65名を同じ時間帯の旧の教育、農学のクラスに分散させることはできるが、別の時間帯のリ組はそうはゆかない。また当時法・経学部の初修外国語のクラスは英語のクラス区分と同一であったので、このリ組の65名という数を中国語独自に操作できなかったのである。

したがって平成4年度には、初級4クラス中3クラスは上記措置によって1クラス55名を達成したが、1クラスだけは65名のまま残ることになった。

翌平成5年にむけ、残り組について検討したが、例えばこれを2クラスに分割すると2名余計に教官が必要になるが、その手当ては難しく已むを得ず、次善の策を取ることにした。定員65名を発音・ヒアリングのクラスのみ2分割し α リ β としたのである。文法は65名のままだが、授業内容からみて大規模でも一応可能であろうということであった。このクラスは文法は他より条件が悪い代わりに発音・ヒアリングでは他より好い条件で授業が受けられるので、平等の観点からもそれほど大きな問題は無い。

これが旧制度下の最後の年で、翌平成6年度新入生から、新カリキュラム、新必修単位のもとでの履修が開始され、その体制下では初級各クラスとも約55名(後述のように新カリキュラムでは初修外国語の平均的定員は40名であるが、なるべく学生の志望を活かせるように中国語は割りまして引受けている)になっている。

2・6 授業内容の改善

香川大学では従来一般教育の受講生に「修学案内」を発行していた。そこには無論外国語の授業内容も含まれていた。一般的にはその外国語の特長の記述と辞書の説明、そして簡単な授業内容の紹介がされる。次に参考に昭和62年度のものを挙げる。

資料1 昭和62年度修学案内

中国語

小林立・高橋明郎・柴田清継

浜西正人・谷本正文

今年の日中国交正常化十五周年、日中平和友好条約締結九年目（期限十年）にあたる。このような外交関係があって残留孤児の肉親捜し、要人の往来、経済・文化・スポーツ交流、留学生の交換は可能となっている。今年はまだ蘆溝橋事変五十周年といわれるが、日中両国間の平和友好関係を不動のものとするには「教科書問題」などに見る如くなお基本的で重要な問題が厳存していることを無視することはできない。

中国は漢族の外に55の少数民族が各々言語と文化を持って生活している統一された社会主義の多民族国家である。中国語は少数民族の言語との対比において“漢語”と呼ばれている。長い歴史と輝かしい文化をもつ漢語は通時的には現代漢語、近代漢語、中世漢語・中古漢語・上古漢語に分けられる。現代漢語は北方方言、吳方言、閩方言、粵方言、客家方言、湘方言などがある。北方方言は漢語区域の四分の三に達し、政治・経済・文化の面でも主要な地位を占め、早くから漢語の共通語（“普通語”）の基盤を成して来た。

我々が教室で学ぶ中国語は現代漢語の共通語であるがその特徴を見ると、発音は現代北京語を標準音とし、語彙は北方方言を基礎とし、文法は現代白話の著明な作品を規範としている。授業のⅠ・Ⅱ（初級）は発音・文法の把握を目標とする。Ⅲ・Ⅳ（中級）は発音・読解に磨きをかける。Ⅴ・Ⅵ（上級）はⅠ・Ⅱ（4単位）Ⅲ・Ⅳ（4単位）計8単位修得者のためのものである。〔a〕は発音・文法〔b〕は読解に重点があることを示す。ⅠaⅠbⅡaⅡbは不合格になった場合、同じ記号の授業を再度履習しなければならないので特に注意されたい。

特に授業内容についての説明の詳しさはどの外国語も似たようなもので、例えばドイツ語は「Ⅰa、Ⅱaは初級文法を主とし、Ⅰb、Ⅱbは初級読本を中心とする。ⅢとⅣは中級講読が中心となる。ⅤとⅥは上級講読である。〔ドイツ語会話〕も積極的に選択するよう期待する」としており、フランス語は「本学で開講するⅠⅡ（初級）、ⅢⅣ（中級）はいずれもこの外国語学習の初歩段階に相当するものである。また、更に勉学を深めたいというこの初歩課程の単位取得者のためにⅤ・Ⅵ（上級）を開講している。初級では基礎文法と併せて、特に発音に重点をおき、簡単な会話力と基礎的な読解力を養成する。中級では読解力をさらに養い、作文と語学学習に不可欠の論理的試行の訓練を行う。上級では文学作品を中心とした演習を行い、フランス文化についての研究と討議をする。このクラスでは同時に基礎的な文体論と翻訳論にも触れるはずである。」という。

従来の授業方式に従えば、これ以上記述するならば、現在発行されているような各時間毎のシラバスという膨大なものを作成しなければならないわけで、当時としてはまず妥当な表記であった。

しかし2・1及び2・4で述べたカリキュラムの系統、共通化の目処が立って、平成4年の

「修学案内」から、グレード進行に合わせたやや肌目細かい案内に切り替えた。下に引いたのがその年度のものである。

資料2 平成4年度修学案内

中国語 小林 立・高橋 明郎・谷本 正文
李 佳坤・日高 良和・八尾 由子

欧州よりも広い国土を持つ中国には多様な言語が存在しているが、この授業では中国大陸で現在標準語とされている「普通話」を指導する。日本文化には周知のように多くの中国の影響があり、その点で中国に興味を持つ諸君もいようし、現在の中国との交流を意識して中国語を学習しようとする諸君もいよう。特にここ数年は中国から多くの学習者等が来日している。本学で研究、学習している中国人も少なくないし、またアルバイト先などで中国人と職場をともにする場合もあり、諸君にとってはあるいは中国語は英語について触れる機会の多い外国語かもしれない。

中国語は文字として漢字を用いているため他の外国語よりとりつきやすく簡単のように見えるかもしれない。しかしこの授業で学習するのは現在大陸で使われている中国独自の簡略化された文字（簡体字）であるし、これらは表音文字ではないので、それぞれの発音を覚えてゆくだけでも大変であろう。なまじ同文の言語と考えず、全くの外国語として取り組むことが重要である。

今年度の授業は次のように構成されている。

授業名	授 業 内 容	担当教官
I a II b	中国語を読み、あるいは書くための文法事項を学習する	高橋 谷本 日高 八尾
I b II b	入門として中国語の発音を学習し、さらに日常表現、簡単な読み物を通して聞くこと、発音することの練習を行う。また基本的単語を覚える。少なくとも半期はネイティブ・スピーカーの指導を受ける機会を各クラスが持つ。	小林 李
III a IV a	発音と読解力を養うと共に、テキストの練習問題などを通して、表現力の向上を図る。	小林 八尾
III b	読解の基礎として1年次学習した文法事項を確認しながら、注を参照して中国語で書かれた文学作品を読む。	高橋 谷本 日高
IV b	原典を教材とした読解練習を通じ、中国語資料を読むうえでの必要技能の習得を図る。	高橋 谷本
V	市販のテキストを使用し、練習問題と取り組むことにより、語学的理解を深める。 I～IV 8単位既取得者のみ受講できる(中国語学演習と共通)	小林
VI	均整の口語文を現代語との対比を視点に入れつつ読む。 本年度は羅貫中「三国演義(三国志)」を扱う。 I～IV 8単位既取得者のみ受講できる(中国語文化演習と共通)	高橋

これは新カリキュラムに移行した平成6年度からは、能力別に整理した現在の形に変えている。

資料3 平成7年度修学案内のグレード進行図

[中国語の教育目標]



なお、付言するなら、中国語の初級のように共通の教科書で共通のカリキュラムにより進行する形の授業に、現在のような各授業時間毎に1頁割くような形態のシラバスは無駄としか言い様がない。

以上平成6年度までに行われた中国語教育関連の改善についてのべた。旧来の授業枠、必修単位のなかでのことで、もとより根本的な改善は望めなかった。そうした条件下では精一杯のこ

ろであったと思う。

抜本的な改善の方向については初修外国語の担当者が平成3年に提言をまとめたが、それは教養教育体制の根本からの変革の動きの中で実施が不十分となり、現在に到っている。

所謂新カリキュラムの授業形態とそれに伴い発生した問題、及び受講学生のアンケートをもとにした、成果の検討を次稿3以下で論述することにする。

なお最後に参考資料を2つおく。

註1 高橋明郎「初修外国語としての中国語教育—本学の現状と問題」

(香川大学一般教育研究第40号：1991)

2 香川大学一般教育修学案内昭和63年度版

資料4 香川大学の中国語教育体制の変化

年 度	事 項	教 官 数	
		常 勤	非 常 勤※
昭和57	法学部設置にともない教官定員増、 常勤2名体制	2	3 (0)
昭和63	初級a系列とb系列の授業内容を分 化、整理	2	3 (0)
平成元	中級a系列とb系列の授業内容を分 化、整理。旧カリキュラムの系統化 終了。 初級2クラスに初めての中国人教師 を配当。 初級文法の教科書を2冊からの選択 制に。 中級のクラス規模を平均化し、1ク ラス90名程に。	2	4 (1)
平成3	初級文法の4クラスで教科書を統一。	2	4 (1)
平成4	初級の総てのクラスで最低半期は中 国人教師の指導が受けられるように 担当時間割りを変更。 初級文法の試験と評価を共通化、中 間・期末の2回制に。 初級4クラス中3クラスで学部別編 成を廃止し、これにより3クラスは 定員65名から55名へと少人数化。 中級の教育学部用クラスに一部法学 部学生を統合し、1クラス70～75名	2	4 (1)

	程度に。 授業案内の形態を大幅に改定。		
平成 5	中国人非常勤の比率を上げ、初級の全クラスに通年で配置。 「中国語会話ⅢⅣ」を開設。 初級の全授業を共通試験化し、評価を1学年で一括して決定する形に。 初級のカリキュラム共通化完了。 前年少人数化できなかった初級1クラスについて、発音系クラスのみ2分割し定員30名に。 中級の学部別クラス編成を全面廃止、1年次の成績による白紙編成方式に。	2	4 (2)
平成 6	初級で新カリキュラム開始。 初級の全クラスが定員55名に。 カリキュラム改定に合わせ、授業案内の図を大幅に修正。	2	4 (3)
平成 7	「中国語会話Ⅴ」を開設。 中級も新カリキュラムに入り、それにともない中級4クラス(含「会話」)を2クラスに減少。旧課程学生の救済用にこの年度だけ中級の再履修専用クラスを1つ設置。	5	5 (4)

※ () 内はネイティブ・スピーカー

資料5 中国語開設科目の変遷

I～VIはグレード、L J E Aはそれぞれ教育・法学・経済・農学という授業対象学部を示す。

昭和63年度

平成4年度

指定科目			
授	業	名	単位数
中国語	I	L a	1
"	II	L a	1
"	I	L b	1
"	II	L b	1
中国語	I	J E ち a	1
"	II	J E ち a	1
"	I	J E ち b	1
"	II	J E ち b	1
中国語	I	J E り a	1
"	II	J E り a	1
"	I	J E り b	1
"	II	J E り b	1
中国語	I	A a	1
"	II	A a	1
"	I	A b	1
"	II	A b	1
中国語	III	L A a	1
"	IV	L A a	1
"	III	L A b	1
"	IV	L A b	1
中国語	III	J ち a	1
"	IV	J ち a	1
"	III	J ち b	1
"	IV	J ち b	1
中国語	III	E り a	1
"	IV	E り a	1
"	III	E り b	1
"	IV	E り b	1
中国語	I	Z a	1
"	II	Z a	1
"	I	Z b	1
"	II	Z b	1

選択科目

授	業	名	単位数
中国語	V	L J E A	1
"	VI	L J E A	1

初級中級の各クラスが学部別に設定されている。

指定科目			
授	業	名	単位数
中国語	I	L J E a	1
"	II	L J E a	1
"	I	L J E b	1
"	II	L J E b	1
中国語	I	J E ち a	1
"	II	J E ち a	1
"	I	J E ち b	1
"	II	J E ち b	1
"	I	J E り a	1
"	II	J E り a	1
"	I	J E り b	1
"	II	J E り b	1
中国語	I	J E A a	1
"	II	J E A a	1
"	I	J E A b	1
"	II	J E A b	1
中国語	III	L J E A ル a	1
"	IV	L J E A ル a	1
"	III	L J E A ル b	1
"	IV	L J E A ル b	1
中国語	III	L J E ち a	1
"	IV	L J E ち a	1
"	III	L J E ち b	1
"	IV	L J E ち b	1
中国語	III	L J E り a	1
"	IV	L J E り a	1
"	III	L J E り b	1
"	IV	L J E り b	1
中国語	I	Z a	1
"	II	Z a	1
"	I	Z b	1
"	II	Z b	1

選択科目

授	業	名	単位数
中国語	V	L J E A	1
"	VI	L J E A	1

初級中級とも学部混合型クラス。

平成5年度

指定科目

授 業 名	単位数
中国語 I LJEa	1
" II LJEa	1
" I LJEb	1
" II LJEb	1
中国語 I JEチa	1
" II JEチa	1
" I JEチb	1
" II JEチb	1
中国語 I JERia	1
" II JERia	1
" I JERib α	1
" I JERib β	1
" II JERib α	1
" II JERib β	1
中国語 I JEAa	1
" II JEAa	1
" I JEAb	1
" II JEAb	1
中国語 III LJEアルa	1
" IV LJEアルa	1
" III LJEアルb	1
" IV LJEアルb	1
中国語 III LJEチa	1
" IV LJEチa	1
" III LJEチb	1
" IV LJEチb	1
中国語 III LJERia	1
" IV LJERia	1
" III LJERib	1
" IV LJERib	1
中国語 I Z a	1
" II Z a	1
中国語 I Z b	1
" II Z b	1

選択科目

授 業 名	単位数
中国語 V LJEA	1
" VI LJEA	1
中国語会話 IIIIVLJEA	2

初級最終の多人数クラスを2分割。
会話が登場。

平成7年度

指定科目

授 業 名	単位数
中国語 1①	2
" 1②	2
" 1③	2
" 1④	2
" 1⑤	2
" 1⑥	2
" II①	2
" II②	2
" II③	2
" II④	2
" II⑤	2
" II⑥	2
" IZ	2
" IIZ	2
" IIIZ	1
" IVZ	1
" IZ a	1
" IZ b	1
" IIZ a	1
" IIZ b	1

選択又は自由の科目

授 業 名	単位数
中国語 III a	1
" III b	1
" IV a	1
" IV b	1
" V	1
" VI	1
中国語会話 III IV	2
" V	1

初級は1授業週2回タイプ。
中級はクラス減。上級の会
話がある。